

図書館だより

 No. 6
平成 25 年 10 月 25 日発行

朝晩の冷え込みがだんだんと厳しくなってきましたが、日中は涼しい風と暖かな日差しが心地よく、外に出かけたくなる陽気が続いていますね。関東の紅葉もこれから本番を迎えようとしています。今年の紅葉は昨年より色づきよく鮮やかとのことですので、何か所も巡って、紅葉を楽しみたいものです。

秋は景色を楽しむのにもよい季節ですが、食を楽しむのにもよい季節です。実りの秋には様々な食材が旬を迎えます。その中で、毎日おいしく食べられて、栄養もたっぷりなのが、“きのこ”です。たくさん食べて、免疫を上げ、寒くなっていくこれからの季節も健康に乗り切っていきましょう。図書館には、秋が旬の食材を使ったレシピ本もそろっていますので、毎日の料理の参考にしてみてください。



葉っぱに詳しくなれる*

471-ハ『紅葉ハンドブック』 林 雅之 || 著 文一総合出版

紅葉と言えば、思い浮かぶのはモミジやイチョウなどですが、山々を赤や黄色に染め上げているのは、それらの葉だけではありません。巻頭に載っている紅葉の葉一覧を見ると、「紅葉する木って、こんなにたくさんあるんだ！」と驚いてしまいます。スキャナーで撮影しているという葉っぱの写真は、とても鮮明で本物の葉っぱを見ているようです。色だけでなく、葉の形や特徴にも注目しながら読むと、さらにこの本が楽しめます。

持ち運びにも便利な大きさなので、この本を片手に紅葉を見に出かけてみてください。落ち葉のじゅうたんを見ながら、そこに生えている木を当てるのもおもしろいと思います。

キノコを使ったおいしい料理*

596-ホ『ホクトのきのこレシピ』 ホクト || 監修 幻冬舎

きのこの研究開発から生産・販売までを手がける“きのこの会社”こと、ホクト株式会社。そのホクトが監修したきのこ料理のレシピは、どれもきのこがどっさりと使われていて、食欲がそそられます。混ぜご飯や炒め物にはもちろん、ディップにしたり、浅漬けにしたりといつもと違ったアレンジの仕方でのきのこをいただくレシピもたくさん紹介されています。

レシピ以外にも、きのこに関する豆知識がたくさん紹介されていて、きのこの持つ力を存分に知ることができます。そして、知れば知るほど、「毎日食べよう！」という気持ちになれます。

スヌーピー展を観に行こう

六本木の森タワー内にある森アーツセンターギャラリーで、現在「スヌーピー展 しあわせは、きみをもっと知ること。」が行われています。チャールズ・モンロー・シュルツ氏が、1950年から引退を宣言する2000年までの50年に渡って新聞に連載してきた漫画『ピーナッツ』 スヌーピーはその『ピーナッツ』に登場するキャラクターです。

今回はチャールズ・モンロー・シュルツ美術館が所蔵する原画が、まとめて展示される日本初の特別展です。開催期間は、来年の1月5日(日)までと、まだ余裕がありますが、油断していると、あっという間に月日が流れていってしまいますので、興味を持った人は「いつ行こうかな」と早めの計画を立てることをおすすめします。ちなみに、この森アーツセンターギャラリーがある52階には展望台「東京シティビュー」があります。東京タワーとスカイツリーの両方が一望できる贅沢な眺めを楽しむことができます。

726-シ『悩んだときに元気が出るスヌーピー』 チャールズ・M. シュルツ || 作 谷川 俊太郎 || 訳 香山 リカ || 選 祥伝社

谷川俊太郎さんの和訳付きで読むスヌーピー。スヌーピーとチャーリー・ブラウン、そして仲間たちの何気ない会話の中での一言が心に染みてきます。心配性のチャーリーはいつも色々なことに悩んでいます。チャーリーと一緒に悩んだり、仲間たちのちょっとした外れなアドバイスに元気をもらったり、束の間、スヌーピーの仲間に加わってみると、「よしまた頑張ろう」という気持ちになれます。精神科の医師として活躍する香山リカさんが選定したストーリーならではの効果です。

それと、本編だけでなく、登場人物一覧も注目です。よく読んでみると、驚きの事実が色々載っていておもしろいです！

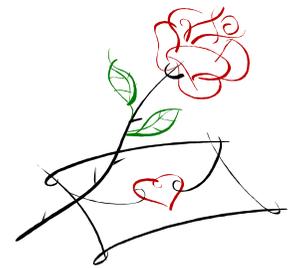


図書館司書の「今月はこの本を読みました」



みなさんからの「こんな本が読みたい」というリクエストで多いのが、「恋愛小説が読みたい！」というもの。しかし、実は私は恋愛小説をあまり読まないで、いつも紹介する時に悩んでいます。それではいかん！と手に取ったのが、森見登美彦さんの『恋文の技術』(913.6-モ ポプラ社)です。

書名も表紙もかわいらしく、恋愛小説だとはばかり思ってみると…、おや、なんだか違うような…。本文は全て主人公の守屋一郎が友人や先輩、妹など、自分の周囲の人々に宛てて書いた手紙です。同時に多くの人と文通している彼は、ととて筆まめで、語り出したら止まらない感じが手紙からも伝わってきます。中には、文通相手の恋愛相談に乗ったり、自分の想い人への恋心が綴られていたり、恋愛話も多く登場するのですが、胸がキュンとするというよりは思わず笑ってしまうような内容です。でも、手紙を書くのは得意なのに、恋文になると、どうしてもうまくいかない、そんな彼の苦悩は微笑ましく、誰かに手紙を書きたくなりました。



読書週間が始まります

来週から読書週間が始まります。期間は10月27日(日)～11月9日(土)の2週間です。この2週間というのは文化の日を中心としています。今年で第67回を迎えた読書週間の標語は「本と旅する 本を旅する」です。本を開くと、そこにはたくさんの世界が広がっています。国境を越えた旅、時空を超えた旅、異世界への旅、どこにいても、好きな世界へと旅できるのが読書の楽しさです。

そんな本の魅力を、この読書週間をきっかけにたくさんの人に知ってほしいと思います。この2週間は、いつもの朝読書の時間だけでなく、登下校の電車やバスの待ち時間や移動時間、寝前の10分間など、ちょっとした時間を読書の時間に当て、まずは、初めの一步ならぬ、“初めの1冊”を踏み出してみてください。ここでは、別世界への旅を楽しめる本を紹介します。



異世界に生きる*

B913.6-オ『月の影 影の海上・下』 小野 不由美 || 著 講談社

ここではないどこか…。日常生活が上手くいかない、周囲に上手くとけこめない、そんな時にはどこか別の世界でなら楽しくやれるのではと夢見ることはありませんか。平凡な女子高生の陽子はある日突然、ケイキと名乗る人物によって十二の国と蓬萊^{ほうらい}からなる世界に連れていかれます。妖魔に襲われ、ケイキとはぐれ、見知らぬ世界で生命の危機に何度も見舞われながら逃げ惑う陽子。その世界では私たちの常識や道德感に通じないのです。本作は十二国記シリーズの最初の巻ですが、シリーズを通して運命に対して懸命に最善を尽くしあきらめない主人公たちが描かれています。十数年ぶりに新作も出版され、また順次新作が出される予定だそうです。続巻を待ち望んでいた人も多く、甘くない別の世界だとしても、「ここではないどこか」は魅力的です。

試したいのは、コールドスリープ?タイムマシン?*

933-ハ 『夏への扉』 ロバート・A・ハインライン || 著 早川書房

‘僕’の猫ピートは、決してあきらめない。コネティカット州の冬は雪に覆われてしまうが、ピート専用のドアを含めて12もあるこの家のドアのどこか1つぐらいは、雪のない夏の世界に通じていると信じている。そしてすべてのドアを‘僕’にひらかせようとする。‘僕’は親友にも婚約者にも裏切られ、やけどぱちになって、コールドスリープで30年後の未来に生きようと思う。そこでなら、ピートと一緒にやりなおせると思ったからだ。発明が大好きで、人付き合いは苦手で、子どもには信頼されるけど、不器用な生き方しかできない‘僕’の、人生を取り戻す冒険は未来からさらに過去、そしてまた未来へと続く。‘僕’はピートと暮らせる未来を作ることができるのか。わくわくする展開と予想外の結末してやられて下さい。

私たちの日本をもっと知ろう

東京が2020年のオリンピック・パラリンピック開催地に決定し、日本全体が7年後に向けて盛り上がりを見せています。国内の、しかも同じ関東内で、オリンピックが開催されるなんて、夢のようです。またとないこの機会に、ぜひ観戦に行きたいですね。

さて、オリンピックの開催地決定に際し、日本のPRに大きく活躍したのが、招致委員のみなさんです。最後のプレゼンテーションは、聞く人の心に強く印象づきました。

日本に暮らす私たちは、日本を訪れた海外の人たちにどのくらい日本のことを紹介できるでしょうか。「日本のことなら、わかって当たり前」と思っている、よく考えてみると、知らないで過ごしていることがたくさんあることに気がつきます。それは、歴史だったり、伝承されてきた技術だったり、日本の誇れる魅力だったり様々です。日本ってこんなところだよと、世界中の人に知ってもらうために、まずは私たちが日本のことをもっと知っていきましょう。



★日本のおもてなし★

おもてなしの心とは*

689-テ『帝国ホテルのおもてなしの心』 帝国ホテル || 編 学生社

帝国ホテルは120年の歴史を持った日本を代表するホテルです。その格式高いホテルで、実践されているおもてなしの数々。そこまでのことをやるのには、時間も労力もかなりかかるはずだと想像が尽きます。そして、そのひとつが例え欠けていたとしても、そんなに不足はないのです。それでも、帝国ホテルではすみずみまで行き渡ったおもてなしでお客様を迎えています。

それは、ささやかなおもてなしの心が、受け取った人の心をどこまでも温めてくれるからです。それは、それが単なる仕事として行われているのではなく、心が込められている証拠。読んでいるだけで、心が満たされていくような気持ちになることからよくわかります。

日本の行事と礼儀*

385-オ『小笠原流 日本のしきたり』 小笠原 清忠 || 著 ナツメ社

日本では1年を通して四季折々の行事が行われています。また、行事以外にも、人生の通過儀礼として、誕生の祝い、結婚の祝い、死の儀式など、多くの習わしも存在します。ひとつひとつのしきたりがいつどのように行われているか、そして、どんな意味を持っているのかを知ることは、日本で暮らしていくことで大切なことです。再確認しながら読んでいくと、行事はもちろん意識していなかっただけで、みなさんもきちんと経験していた儀礼がたくさんあるかと思えます。それらを思い出しながら、ページを進めていってみてください。

また、本の後半部分は、立居振る舞いについて書かれています。美しい所作ができる人は、品よく美しい人に見えます。この本を参考に美しい立居振る舞いも学んでいきましょう。

★日本の美★

水玉の女王*

702-ク『無限の網 草間彌生自伝』 草間 彌生 || 著 作品社

水玉がトレードマークの芸術家 草間彌生。世界的に活躍する彼女の半生が、彼女自身の言葉で書かれています。

母との確執、単身アメリカに渡っての極貧生活の中での創作活動、精神的な病との闘い、誤解と偏見、様々な困難が彼女の前に立ちはだかります。しかし、『苦しみや不安や怖れと日々闘っている私にとって、芸術を作りつづけることだけが私をその病から回復させる手段だった。』と、彼女は思いの限りを注ぎ込んで芸術に生きます。その内から溢れ出す強いエネルギーで、自身の存在を揺るぎないものへと発展させていった草間彌生の生き方は、芸術家として見ても、女性として見ても、とても衝撃を受けるものです。

庭に作り出された芸術*

708-ニ『枯山水』 NHK「美の壺」制作班 || 編 NHK出版

枯山水とは、水をいっさい使わずに山水を表現した日本庭園の様式をいいます。その歴史は室町時代から続き、寺院だけでなく、現代に建てられたホテルや料亭などの庭にも用いられ、広く長く日本人の心を惹きつけています。

見る人それぞれの心を映し出すという枯山水は、何の知識も持たずに観ても、様々な想像が膨らみ、飽きの来ない趣があります。その枯山水をさらに奥深く味わう3つのツボがこの本では紹介されています。水の流れを読み解き、石の躍動を感じ、切り取られた景色を楽しむ。それぞれのツボを読みながら、枯山水の名庭の写真をじっと眺めていると、心に静寂が生まれてきます。みなさんも、渋みのある日本の美を感じてみましょう。

古から伝わる技*

750-ニ『伝統工芸ってなに?』 日本工芸会東日本支部 || 著 うんそうどう 芸艸堂

伝統工芸品は熟練された細やかな技で作られ美しい見た目を持つ同時に、日常生活で用いる生活用具でもあります。

古くから現代に至るまで受け継がれてきたそれらが、どのような工程を経て、出来上がっていくのかが説明されています。また、作品の持ち味となる色や艶などに用いられる材料についてや、注目してほしい部分などについても詳しく載っています。技法を知って、改めて、職人たちの手で作り出される形や模様の美しさに魅せられます。こうした日本の貴重な伝統工芸の数々を現代の私たちがしっかりと知り、関心を持つことで、さらにこの先の未来へ技を引き継いでいきましょう。

★日本のパワースポット★

八百万の神様がいる国*

B172-ト『「日本の神様」がよくわかる本』 戸部 民夫 || 著 PHP研究所

“神様”と一括りに呼びがちですが、聖地同様、日本にはたくさんの神様がいらっしやいます。その数は八百万とも言われています。この本では、その神様の中から、日本の主な神様、九十九神が取り上げられています。神様それぞれの起源や祀られている神社が紹介されている他、神様それぞれの性格まで知ることができて、とてもおもしろいです。

普段、私たちが“お稲荷さん”や“エビスさま”と呼び親しんでいる神様にも正式な名称があることや、日本史でもお馴染みの聖徳太子が木工職の守護神であることなど、知って楽しい発見もたくさんあります。読んだ後はきっと身近に神様を感じることができるでしょう。そして、次に神社を訪れる時は、どんな神様が祀られているのかを気にしてみてください。

新 日本の世界遺産*

291-グ『富士山のすごいひみつ100』 グループ・コロンプス || 編 主婦と生活社

2013年6月、世界文化遺産に登録された富士山。世界文化遺産になったことで、これからますます有名になるであろう富士山のことをおさらいしてみましょう。

この本は富士山を自然・歴史文化・登山・噴火など、様々な角度からわかりやすくコンパクトに解説してくれているので、富士山の入門書として役立ちます。しかも「表面積が日本で一番小さな香川県や大阪府の面積の約半分」、「富士山の山頂には昔、公衆電話があった」、「山頂までホッピングしたひとがいる」など、ひとつひとつの豆知識がとても覚えやすいです。

また、トイレやゴミの問題、登山者の心がけなど、美しい富士山を守るために考えていかなくてはならないと気づくこともたくさんありました。

日本のパワースポット*

291-ウ『日本の聖地ベスト100』 植島 啓司 || 著 集英社

伊勢神宮や出雲大社、明治神宮など、日本には名立たるパワースポットが存在します。しかし、その他にも日本の各地には、まだまだ多くの聖地があります。その聖地ベスト100が紹介されていて、ものすごくパワーのつまった本です。

各地の聖地を訪れた筆者が綴った文章をじっくりと読んでみると、その場所が放つ神聖な空気のようなものを感じてきます。今まで知らなかった場所なのになぜか心を惹かれたり、この本で読んでさらに興味を湧いてきたりと、読む人それぞれが心に残る聖地を見つけられるのではないかと思います。気になる場所をメモしながら、日本列島の聖地めぐりをしている気分を読んでください。

★日本人の技★

日本の自慢の会社*

335-サ 『小さくてもいちばんの会社』 坂本光司&坂本光司研究室 || 著 講談社

会社の名前に込められた思いや商品誕生の秘話など、どの会社にもその会社のよさが伝わってきて、心がほっこりとするエピソードが書かれています。また、創業理念や信条には、「業業を通じて人類に貢献する、そのために、何より人との絆を大切にさせよ」、「喜ばれることに喜びを」など、どんな職業に就いたとしても、働く上で大切にしたい名言がたくさんありました。海外の企業が日本に進出してきている中、日本にも世界に誇れる色々な“いちばん”会社がたくさんあることを知り、嬉しく感じます。また、たくさんの素敵な会社を知ることは、これから社会へと出ていくみなさんが“自分のやりたいこと”を見つけるのにも役立つと思います。

3. 11後、日本で起きていたこと*

369-イ 『できることをしよう』 糸井 重里 / ほぼ日刊イトイ新聞 || 著 新潮社

東日本大震災後、被災地の惨状を見て、誰もがきっと考えたこと。それは、「自分にも何かできないか」ということ。そして、全国各地でその思いが力となり、形となり、被災地へ届きました。そうして行動していたのは、特別な人だけでなく、どこにでもいる“ふつうの誰かさん”たちです。

胸が熱くなるような光景や話にみなさんもどこかで出会っているかと思いますが、この本を開いて、また新たな感動に出会ってください。「できることをしよう」というシンプルな気持ちから、こんなに大きな力が生まれていたんだということは、本当にすごいことだと思います。

日本の絆を再確認し、今もなお懸命に復興の道を歩んでいる人たちのことを考えてみましょう。

スカイツリーに注がれた技術*

526-七 『東京スカイツリー』 平塚 桂 || 著 ソフトバンククリエイティブ

日本の新しい観光名所のひとつでもあるスカイツリーが完成してから、1年半余りが経ちました。自立式電波塔として世界一の高さを誇るこのスカイツリーですが、みなさんは高さの他にスカイツリーの特徴をいくつ説明できるでしょうか。特殊な建物のように見えて、実はひとつひとつの技術を見ていくと、日本中にある「ふつうのビル」をつくるなかで蓄積された科学技術の粋が集まっていると言われるスカイツリー。その技術と工夫を学びましょう。写真だけでなく、わかりやすいイラストで、その構造を説明してくれているので、「気になっていたけど、難しそうだから、何となくそのままにしていたな」という部分もしっかりわかってくると思います。最後の章では、スカイツリーの楽しみ方も載っているので、これから行く予定のある人は要チェックです。

★世界から見た日本★

大切にしていきたい日本の良さ*

361-シ 『日本人が世界に誇れる33のこと』 ルース・ジャーマン・白石 || 著 あさ出版

この本は校長先生が夏の推薦本としても紹介してくださいました。

日本に長く滞在し、日本人の気質や習慣に触れてきた、著者のルース・ジャーマン・白石さんが、「日本人の持つこんなところがすばらしい！」と外国から見た日本の良さを紹介しています。「決断に時間がかかる」、「ほめられ下手」など一見、マイナスと捉えられがちな面も「よく考えて行動するからこそ、よい結果を出してくれる」、「謙虚な心で、相手を持ち上げる」と、プラスの視点で見られています。こんな風に賞賛してもらえることを嬉しく感じる(思わず一気に読みましてしまいます)と共に、これからもこの良さを失わず、自分たちが受け継いでいかなければと日々の生活がグッと引き締まるのを感じます。

外国人が日本を旅すると、おいしい発見の連続です*

383-ブ 『英国一家、日本を食べる』 マイケル・ブース || 著 亜紀書房

「おまえに、日本料理の何がわかるっていうんだよ、え？」

人気のフランス料理店で、この料理は日本の影響を受けていると匂わせた瞬間、友人のカツシは吐き捨てるように言い放った。そしてこれを読めと、辻静雄による日本料理の本を渡すのです。その1冊の本に影響を受けた英国人フードジャーナリスト・マイケルは、日本行きを決断します。本当の日本料理を自分の目で見て、舌で味わい、今現在の日本料理を知りたくなったのです。そのアイデアは家族にも受け入れられ、なぜか全員で日本を旅することに。6歳と4歳の息子のおかげか、旅は出会いの多い、楽しいものになります。目的の食だけでなく、息子のリクエストのポケモンセンターも含む日本文化を探訪する、楽しく心温まる日本珍道中記になっています。

英語を使って伝えてみよう*

837-ヴ 『英語で伝えたいふつうの日本』

江口 裕之 / ステュウエット・ヴァーナム・アットキン || 著 DHC

この本を読んでいると、世界の人から見ると、日本で送る日常生活のこんなところが珍しかったり、興味深かったりするのだなと気づくことがたくさんあります。それは「確かに」と頷けるものもあれば、「これって当たり前じゃないんだ」と驚くものもあり、ひとつひとつを楽しめます。

そして、それを英語で伝えようとする、どのような言い回しになるかが英語と日本語の対訳で載っています。単語訳や表現の例文もついていて、解説がとてもしっかりとしているので、為になる知識が身につきます。英語で日本を紹介する練習にも、自分の国をもっとよく知るための勉強にもオススメです。